

私が感じた不安と恐怖

市内に住む一人暮らしの高齢者のかたや、聴覚に障害のあるかたに、昨年の災害時に苦労したことや不安に感じたことを伺いました。

- ★ 防災無線の屋外スピーカーは、風の音にかき消され、何を放送しているのか聞き取れなかった。
- ★ 防災無線のサイレンはかろうじて聞こえるが、内容までは聞き取れず、何が起きているかはわからない。
- ★ 停電になると、手話や口の動きを読むことができず、コミュニケーションがまったくとれない。
- ★ 2階に在宅中、雨や風の音がまったく聞こえず、気がついたときには1階が浸水していた。
- ★ 突然の停電で何が起こったのかわからず、携帯電話の灯りを頼りに1階に下りるのが精一杯だった。

他にも貴重な意見をたくさんいただき、ありがとうございました。

～被災地のとりくみ～

オリジナルマップで犠牲者ゼロに

災害を経験した被災地では、過去の教訓を生かし、犠牲者ゼロを目指したさまざまな取り組みが行われています。

過去に水害で多くの犠牲者を出したある地区では、町内会の高齢者や身体障害者、町内会未加入者のかたなど、家ごとに色分けしたオリジナル防災マップを作成。災害発生時には、あらかじめ構成された情報収集・救助・避難誘導・食料確保などの班が立ち上がり、独自のマップをもとに活動するよう組織されています。また、日ごろの訓練も積極的に行われ、結成後に起きた災害でも大きな成果をあげています。



住民の手によるマップの作成

消防のたもと

たんごの風 23号

119

火災・救急・救助

代表 62-0119
総務課 62-8119
管理課 62-8129
予防課 62-5119

あなたの命綱は

災害弱者と地域防災

昨年、京丹後市に三十数年ぶりとも言われる大きな台風が直撃し、大変な被害を受けました。大規模な災害が起こるたび「地域防災」の大切さが話題になります。みなさんのまわりにはいるいるなかたが暮らしおられるかもしれませんが、そのなかには自分の身を守ることに困難な「災害弱者」と言われるかたも暮らしておられます。今回は「災害弱者と地域防災」について考えてみましょう。

※「災害弱者」…65歳以上の高齢者や心身に障害があるかた、小さなあひさんなど、災害が発生した際、自力での避難などが困難と思われるかたを「災害弱者」と呼んでいます。

■わがまちは自分たちで

災害が発生したときの対応は、市役所、消防、警察などの行政機関が中心となって行うものです。しかし、昨年のような大災害が起こると、住民のすべての要望に対応することは非常に困難です。そこで注目されるのが、自治会など地域での防災です。自主防災は、阪神淡路大震災から話題となり、自治会で行う自主防災組織など、日ごろから災害に備える動きが各地で見られるようになりました。



多くのかたが犠牲になった阪神淡路大震災

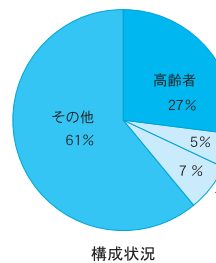
また、地域に根ざした消防団は地元の情勢に詳しく、ひとたび災害が発生すれば救助や復旧活動に大きな役割を果たし、地域防災の心なめと言えます。「わがまちは自分たちの手

■4割が災害弱者



地域防災のかなめ

全国的に高齢化が進み、京丹後市でも六十五歳以上の高齢者のかたは全体の二七％を占めています。加えて核家族化による高齢者のかたのみの世帯が年々増加しています。また、視覚や聴覚に障害のあるかたも多く、中には視覚・聴覚ともに不自由なかたもおられます。京丹後市では、子どもを含めると約四割が、この災害弱者ということになり、五人に一人は高齢者、一人は障害者、一人は子ども、一人はその他という構成状況です。



二人が何らかの援助を必要としているかたということになります。

火災を含めたあらゆる災害において、災害弱者のかたが犠牲になる確率は高く、そのようなかたに、どんな不自由・不便があつて、どのような援助・対策が求められているか、まず理解することが、防災対策を考えるうえで、重要ではないでしょうか。

■いつも抱える不安

災害時に大切なのは、正しい情報を知ることです。しかし、情報を知る手段に限りがある災害弱者のかたにとって、その情報を知ることが難しいのです。たとえば、視覚でしか情報を得られないかたにとつて、停電は深刻な問題となります。テレビからの情報はもちろんのこと、手話も使えず、口の動きを読み取ることもできず、「いくつかの内ひとつ」ではなく、「唯一の手段」を失うことになるからです。常に「いま何が起きているのか」という不安を抱いておられるようです。

■アナログとデジタル

昨年の台風で被害にあわれたかたへ実施したアンケートや取材の中で、こんな声がありました。「突然の停電に事態がみ込めず、ひとり不安におびえいたところへ届いた、安否確認のための一通の携帯メール。外部との連絡が取れたことが何よりうれしかった」、また「近所のかたや区長さんが直接声をかけてくれたので安心した」と振り返るかたもおられました。携帯電話は、災害などの停



支え合う気持ち

電時にはとても役立ち、なかでもメール機能は、混信の影響を受けにくく、災害時の連絡手段として大いに注目されています。しかし、高齢者のかたにとつては、その機能を使いこなすことは大変なことです。一方、昔ながらの近所付き合いを大切にしながら、誰にでもできる対策です。

■環境づくりとアピール

地域では、防災訓練や各種の行事が行われますが、災害弱者など行動に制約があるかたには、参加はもとより、その機会すら少ない現実があります。サポート体制の課題もあります。サポーター体制の課題もありませんが、災害弱者のかたを含めた、多くのかたが参加できる環境づくりが必要ではないでしょうか。



積極的に地域参加を

■小さな声のつなぎ

大きな災害が起きると、そこには必ずボランティアの存在があります。助け合い、支え合う気持ちに、人のつながりの大切さを実感します。地域防災は、それぞれの立場で感じる不安や戸惑いを理解し、共有することが大切ではないでしょうか。わが身を守ることも大切ですが、地域の中から犠牲者を出さない、「命綱をつなぎ合う」そんなまちでありたいものです。